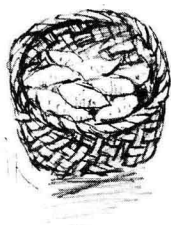


少年風の中をいく

宮脇紀雄／作 北島新平／絵





913

宮脇紀雄

少年 風の中をいく

国土社 1984

146p 22cm <国土社の新創作童話—④>

国土社の新創作童話—④

少年 風の中をいく

初版 1 刷印刷

初版 1 刷発行

著者

発行者

印刷所

発行所

☎112

電話

振替

1984年11月15日

1984年11月25日

宮脇紀雄

長宗泰造

株式会社 厚德社

株式会社 国土社

東京都文京区目白台1-17-6

東京 (03)943-3721(代)

東京 6-90631

©宮脇紀雄 北島新平 1984

乱丁・落丁本はおとりかえます。

ISBN4-337-13304-6 C8391

少年風の中をいく

宮脇紀雄・作 北島新平・絵



へもくじ

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
やきイモほっこり……	水ようかん……	さよならラケット……	父のことば……	テニスの試合が……	キツネ火……	子守凡天……	お寺の庭に……	ヒイラギ屋のはなれ……	ウサギの子……	芝居がくる……
95	83	73	64	54	45	37	29	23	10	4



15 14 13 12

いたずらトンビ……………107
 もらった子犬……………128
 とうさん、たおる……………133
 出発の日……………138
 あとがき……………146



1 芝居しばいがくる

小川の水をひいて、水車すいしゃが、ぐるぐるまわっています。小川にはハヤがちらちら。土手どての草は、青くしげっています。近くの竹やぶで、スズメがにぎやかにさわいできます。

たんぼのむこうの、こんもりとした山は、あたたかい日の光の中に、ねむっているよう。

「しばやがくるそうな……」

「うん、ええなあ。見にいこうで。」

「みんなで、べんとうもってなあ。」

このへんでは、芝居しばいのことを、しばやというのでした。

すこしやせっぱの友一ともいち、すこしでぶっちよの新次しんじ、ふたりの少年が、小川の土手どての草道を、たのしそうに、話しながらかえってきます。同じ四年生で、村の学校のかえりでした。

たのしみのない山の村では、畑仕事はたけしごとがいそがしくなるちよつとまえに、旅まわりたびの役者やくしやをよんで、村芝居しばいがかかるのでした。それはたいてい、ちんじゆさまのけいだいへ、にわか作りの小屋こやがけのぶたい。見物人は、こもや、むしろをしいた上にすわつて、青天井あおてんじようの下で見るのです。頭の上の空には、星がチカチカ光つて。

中国山脈さんみやくの、山なみのあいだにできた、小さな村の山やまはどこまでもつづいていきます。

山すそに、かたむいた畑はたけがあり、谷あいには、せまいたんぼが、だんだんになっていました。そうして、そのたんぼのほとりや、丘おかのかげに、てんと、百しよう家やがあるのです。

「なんでもな、岡山おかやまの町で、えらいひょうばんとつた、役者やくしやじやつて。」

「そいじゃ、おもしれえぞう。」

「ええなあ、たのしみじゃなあ。」

ひとりでに、少年たちは、とびはねるような足になっています。

石じぞうの立っている、ふたまた道にきて、ふたりは手をふりあい、

「じゃあな！」

「あばよ！」

ふたりは右左に、わかれていきました。

友一ともいちはひとりになって、ムギ畑むぎはたけにそつた道をかえつてきました。下をむいて、歩きながら、

(——ああ……)

友一ともいちは、ためいきをつきました。わすれていたかなしいものが、むねにこみあげてくるのを、どうすることもできません。

友一ともいちのかあさんは、去年きよねんの冬、病氣びようきでなくなったのです。となり町の病院びよういんへ、なん



どもでたりはいったりしましたが、おなかへ水のたまる病氣で、とうとう、なくなつてしまったのでした。

それは、ちらちら小雪のふる、寒い日でした。とうさんにつれられ、友一は病院へいきましたが、そのときかあさんはもう、友一の名をよぶこともできなかったのです。ねえさんの美代、弟の秀、友一と、とうさん、四人をあとのこして、かあさんはなくなりました。

(しばやにどうぞ、いかれるじやろうか?)

かあさんのながい病氣で、友一の家ともいちのくらしは、とても苦しくなっていました。

畑はたけのムギは、あたたかい春の日をうけて、青くきれいに、のびています。友一は、青いムギ畑をみつめると、パツとかけだしました。なにかをふりはらうように、かたのカバンをかたかたならして。

「ただいま!」

「……」

家へかえって、大きな声をだしましたが、なんのへんじもありません。

友一ともいちの家は、山をせに、前は畑はたけ、南にむかってたっていました。古い、わら屋根やねの母屋おもやが、のきがすこしかたむいています。それとならんで、納屋なやはかべがはげかかって、それはいかにも、さびしい山おくの村の、まずしい百やしよう家でした。

とうさんは、たんぼでしょう。六年生のねえさんは、まだ学校で、一年生の弟は、はやくかえってもうどこかへあそびにいったのでしょうか。

いつものことなので、友一ともいちは気にもせず、戸をあけて家の中へはいりました。柱はしらに、カバンをかけようとすると、なにか、書いたものがはつてあります。

「長ぞうりの 畑はたけへ きたれ

友一ともいちどの おやじ」

「フフフフ……」

友一ともいちは、ひとりでわらいだしました。とうさんには、ちょっと、ひょうきんなどころがありました。

「おやじだとき、フフフ……」

とうさんは、このごろ口ぐせのように、

「友、おまえももう四年生になったんじや。野良へでて、おやじの手つだいをせにや
いけんぞ」

と、いつていたのです。

ひとりごとをいつて、友一は台所の、かめの水をくんでごくごくのみました。

② ウサギの子

「長ぞうりの畑」というのは、うら山のすそにあるだんだん畑でした。

どうして、そんな名まえなのかわかりません。畑が、長いぞうりの形をしていると
いうわけでもないのに。

友一ともいちがでかけていくと、とうさんはせつせと、山ぎわに、かきねのようなものを作っています。むこうはちまきで、むちゅうになつて――。

「とうちゃん、なんしてるの？」

「おお、友ともか。」

とうさんはふりかえり、はちまきの手ぬぐいをとつて、つるりと、顔のあせをぬぐいました。

「どうするの？ そんなもん作つて。」

「シシよけよ。」

と、とうさんはいました。

「ちかごろはよう、ちよくちよく、山のシシがでてなあ。畑はたけをあらすのよ。山のけんは、こんだけでもきらうのよ。」

シシというのは、イノシシのこと。そういえば友一ともいちも、いつか村の人たちが、シシがでてこまるというような話をしていたのを、きいたことがあります。

「友よ。おまえ、その小竹や、わらをとって、わしにだしてくれ。わしがつぎつぎ、しばるのぞな。」

「うん。」

このごろ、とうさんは友一ともいちに、よくあれこれ用事ようじをいつけるのでした。友だちはまだ、たいていがみんな、あそんではかりいるのに、友一ともいちだけが用事ようじをいつけられるのは、いい気もちではありません。

「ボク、勉強べんきょうがあるのに。」

と、不平ふへいをいうと、

「勉強べんきょうは、学校でするのじゃろうが。」

「宿題しゅくだいもあらあ。」

「すまん、すまん。」

とうさんにあやまられると、友一ともいちはこまるのです。かあさんがなくなつて、とうさんが仕事しごとにおわれるのがわかつていました。

ホホウ ケキヨ！

ケキヨ ケキヨ ケキヨ！

山のクヌギ林のほうから、山ウグイスがいい声をはりあげていました。このへんでは、寒い冬のほかは、いつでもウグイスがなっています。

友一ともいちが、とうさんの仕事を、手つだっていると、

「おーい、伊助いすけさア！」

下の道のほうから、よぶ声。

伊助いすけというのは、とうさんの名まえ。それをきくと、とうさんはぎくんとなって、

「友つとも、るすじやというてくれ。ぜったい、るすじやとな、ええか。」

いいすてると、あわてて近くの山の木のしげみへ、もぐりこみました。

「伊助いすけさア、伊助いすけさア！」

「おーい。」

友一ともいちはへんじをして、下の道の見えるほうへでていきました。

町の江田^{えだ}のおやじが、とりうち帽^{ぼう}をかぶって、犬をつれて立っています。江田^{えだ}のおやじは、家へなんべんもきたことがあるので、友一^{ともいち}もよくしっています。

「やあ、ぼうず、おとういるか？」

「とうちゃん、るすだい。」

「どこへいったぞ？」

「しらん！」

「なに、しらんて。かくすんじゃないぞ。」

「ほんまにしらん。学校からもどってきたら、もうおらなんだもン。」

友一^{ともいち}はいっしょうけんめい、気をおちつけ、はらに力をいれていました。

「チエツ！」

いまいましそうに、おやじは舌打ち^{したう}し、

「よういうといてくれ。今月^{こんげつ}はどうでも、全額^{ぜんがく}とはいわんが、利子^{りし}だけでもいれてくれんことにやア、こっちにもかんがえがあると。ええか、わすれないようにな。わ

